

「高橋亀吉文書について」

中 谷 孝 久

A Note on Takahashi Kamekichi Documents

*NAKATANI Takahisa*

## 高橋亀吉文書について

中谷 孝久

### 1 序

高橋亀吉には著名な日本経済史に関する三部作『大正昭和財界変動史』（全3巻）、『日本近代経済形成史』（全3巻）、『日本近代経済発達史』（全3巻）があるが、これら以外にも高橋亀吉は多くの業績を残している。高橋亀吉は、理念や境遇・立場の相違がある中で、様々な分野の人たちの間でも高く評価されるエコノミストである。それと同時に、名前の前に「生涯現役」など形容表現が付くエコノミストでもある。

代表的な評伝に「生涯現役の経済評論家」として纏めた鳥羽欽一郎（平成4年）がある。地元徳山で少年時代を取り上げたものとして脇英夫（1988）がある。インタビューをもとにして改めて稿を起こした中村隆英（平成10年）では、高橋亀吉の経歴を紹介しながら専門的観点から新評価解禁論争と経済史家として側面に焦点を当て、高橋亀吉の洞察力の鋭さと独創性を滔々と著している。また、エコノミストとしての姿勢に焦点を当てたものとして、谷沢永一（2003）がある。思想的背景については、田中秀臣（2003）（2005）がある。経済思想の側面からは、杉原四郎・逆井孝仁・藤原昭夫・藤井隆至編著（1990）において取り上げられ、老川慶喜（1990）と宮島英昭（1990）が寄稿している。高橋亀吉の経済学の特徴について、簡潔に纏めたものとして上久保敏（2003）がある。

高橋亀吉（1891－1977）が没したとき、当然

のことながら『週刊東洋経済』（1977年2月26日号：pp. 64-71）において「追悼集」が生まれ、下村治・吉野俊彦・石井久・丸太芳郎の4氏が寄稿している。さらに、時を経て、高橋亀吉が証券関係と縁が深かった関係から日本証券経済研究所（1989）の研究雑誌『証券研究』89巻においても、特集が組まれている。その特集には、原朗・柴垣和夫・橋本寿朗・宮島英昭・小林和子の5氏が寄稿している。小林和子（1992）は『証券研究』（1992年9月号）において、「高橋財界月報」について紹介している。さらに、小林和子（2000）は別の『証券レビュー』（第40巻第1号）においても高橋亀吉の証券市場との関連について述べており、その前半部分において、高橋亀吉文書の来歴と評伝について簡潔に述べている。

東洋経済新報社編（2000）に見られるように、高橋亀吉はエコノミストの間で敬愛されており、評価が高い。また、別人の『私の履歴書』においても取り上げられており、金森久雄（2005）や石井久（2006）は『私の履歴書』において高橋亀吉を取り上げている。金森久雄（1980）は自著においても1章を割り、高橋亀吉を「現実直視のエコノミスト」として紹介している。

高橋亀吉の著作を紹介したり、引用する人も多く、田中直毅（2003）は高橋亀吉の先見性を賞賛しながら、『大正昭和財界変動史』を紹介している。また、末村篤（2007）に見られるように、『株式会社亡国論』は折に触れて取り上げら

れ、日本思想史の観点などからも取り上げられている。

同じ東洋経済新報社に勤め、個人的にもよく行動を共にし、よく鼻息にされていた根津知好(1986)は高橋亀吉の経済学の特徴とその軌跡を紹介している。私的な生活の上でも極めて親しい間柄であり、高橋亀吉に私淑していた石井久(2005)は、石井久(2006)『私の履歴書』に限らず、石井久(1999)においても、深い付き合いの中から感じた高橋亀吉の印象・嗜好から理念や方法の意義について言及している。

高橋亀吉はインタビューも多くこなしており、『エコノミスト』毎日新聞社では、「連載社会科学五十年の証言」として、1973年12月18日号を皮切りに、インタビュー記事を掲載し、一日に「経済評論家：高橋亀吉」を取り上げ、10回に亘り連載している。その時の聞き手は安藤良雄(当時：東京大学教授)と原朗(当時：東京大学助教授)である。このインタビュー記事からも高橋亀吉の足跡を辿ることができる。また、対談も多く企画され、『実業の日本』1976年1月1日号では、松下幸之助と対談している。

このように、高橋亀吉が取り上げられるのは、高橋亀吉が大正から昭和にかけて経済評論家あるいはエコノミストとして名を馳せ、数々の仕事をこなし、多くの著作を発表し、それらが高く評価されてきたことによる。高橋亀吉の足跡については、高橋亀吉自身による『私の履歴書』(昭和35年)や『高橋経済理論形成60年—日本経済激動の時代と私の人生—』(昭和51年)『私の実践経済学』(1976)等において全貌を知ることができる。また、高橋亀吉は自身の著作については、高橋亀吉(昭和51年)において自ら著作を整理し、体系的に分類も行っている。さらに、様々な活動を通じて自然の内に収集され、そのまま収蔵されている文書はかなりの数になる。多くの文書を残した一人として数

えられるだろう。高橋亀吉は研究上も多数の資料を残すとともに、審議会に関連する資料も多く、几帳面に保存し、驚くほど整理されている。

高橋亀吉の蔵書や著作や文書の類は生前や没後に寄贈され、散逸はしていないものの、6カ所に分散している。伊藤隆(2004)は高橋亀吉の簡潔な紹介と高橋亀吉文庫と文書の来歴について記している。それとともに、近現代資料・関係文書を調査し、収集・整理にあたり、その一環として高橋亀吉に関する文書も精力的に収集し、文書の利用が便利になり、また総合して利用できるように国会図書館憲政資料室に統合する尽力を重ねている。

徳山大学総合経済研究所(現：総合研究所)には、すべてではないが、高橋亀吉文庫としてほとんどの著作が収蔵されている。それとともに、本人が蒐集した資料や関係した委員会の資料など書類の一部が収蔵されている。これらの中でも、徳山大学総合研究所の高橋亀吉文庫の特色と考えられる文書がある。高橋亀吉は著作の改訂などで直接著作に書き込みを行い、新聞記事や関連資料などを本の中に栞として挟んでいる。これは高橋亀吉の著作「経済史三部作」の内2著作と『金融の基礎知識』になされており、総合研究所ではこれらを画像ファイルとして「電子文書」化している。

本稿では、日本証券経済研究所や国会図書館憲政資料室などの高橋亀吉文書を始め、近代史料・関係文書文書の中に収録されている文書を紹介するとともに、国会図書館憲政資料室などの文書の中から、高橋亀吉の残した足跡について、『高橋財界月報』の発行、日本経済研究所の創設、「山口県建設十年計画」の策定に関する資料を紹介する。

\*本稿は徳山大学総合研究所における高橋亀吉顕彰事業の調査研究の一部である。顕彰事業では、総合研究

所のホームページに「高橋亀吉サイト」を設け、著書や文書を紹介すると共に、徳山大学総合研究所が収蔵する高橋亀吉関連の文書目録を作成している。また、高橋亀吉が著作に挟み込んだ資料を整理し、著作に直接書き込んである箇所を電子文書化している。さらに、国立国会図書館憲政資料室の『高橋亀吉文書目録』と『高橋亀吉関係文書目録』（第2次受入分）を電子ファイル化し、徳山大学総合研究所『高橋亀吉関連文書目録』と統合したファイルを作成している。これによって、単純であるが、文書の横断検索が可能となっている。

## 2 高橋亀吉文書と文庫

### 2.1 拓殖大学図書館「高橋文庫」

拓殖大学では、高橋亀吉が晩年の1956年から1973年まで教授として教鞭を執っていたことから、高橋亀吉が所蔵していた洋書449冊を大学に寄贈し（昭和42年）、図書館では「高橋文庫」として収蔵し、拓殖大学図書館編（昭和43年）『蔵書目録第1輯高橋文庫分類目録』を作成している。（『拓殖大学百年史・部局史編』）

拓殖大学図書館の「高橋文庫」は貴重図書として一般蔵書とは区別されている。その結果、現在のところ、図書館の蔵書データベースには登録されていないが、OPACで検索することはできない。（拓殖大学図書館への問い合わせにより作成。記して謝意を表す。）ちなみに、高橋亀吉の著作は一般蔵書として登録されているもので80点近くが所蔵されている。

### 2.2 日本証券経済研究所「高橋亀吉文庫」と「高橋亀吉文書」

高橋亀吉の没後間もなく、高橋家から東洋経済新報社に高橋亀吉の蔵書と資料の類を寄贈す

る話があったが、文庫・文書の管理上や利用上に難点が予想され、非常に縁の深かった日本証券経済研究所に石井久氏等の世話によって高橋亀吉の蔵書や資料の類が寄贈された。蔵書は約13,500点に上るが、蔵書と共に、高橋亀吉がその生涯をかけて収集した、あるいは仕事の遂行過程で自然に発生した資料が寄贈されている。

日本証券経済研究所の図書館では、「高橋亀吉文庫」の目録を作成するとともに、文書についても整理し、高橋経済学を追究するとともに、日本資本市場発達の歴史的背景の研究に役立てている。

その後、日本証券経済研究所の文書については、後述する国会図書館憲政資料室に収蔵された「高橋亀吉文書」とともに、伊藤隆（近代日本史料研究会代表）が高橋家の同意を得て、日本証券経済研究所から借り出しては複写し、現在、国会図書館憲政資料室において「高橋亀吉関係文書」（第2次受入分）として、目録（A4版型、36頁、547点）が作成されるとともに、利用に供されている。本稿では、他の文書と区別するとき、日本証券経済研究所の英語表記（Japan Securities Research Institute）の略記JSRIを識別コードとして利用することがある。

### 2.3 周南市立中央図書館「高橋亀吉文庫」

高橋亀吉が徳山出身である縁から中国地方のロータリークラブの大会に講師として招聘されたことがある。この講演の様子は『徳山商工会議所所録』（昭和51年2月25日、第203号、pp. 2-12）において「私の人生と経済研究の旅路」として紹介されている。これは文書として近代日本史料研究会『高橋亀吉関係文書目録』p. 41、「3 活字史料（定期刊行物を含む）」の中KINS3-1-100（封筒番号4-79）に収蔵されている。（ここに付けられているコード「KINS」につ

いては、「近代日本史料研究会」の項を参照。）

この講演を機会に、徳山ロータリークラブ会長黒髪直久氏の要請により、徳山商工会議所に寄贈していたが、さらに徳山商工会議所が高橋亀吉の著書を買増しして、昭和61年に徳山市中央図書館（現：周南市中央図書館）に計137冊を遺品とともに寄贈している。（脇英夫（1988）、p. 2）徳山市立中央図書館（昭和61年）の『高橋亀吉文庫資料目録』（B5版型、11頁）によると、徳山市立中央図書館（現：周南市立中央図書館）には、徳山商工会議所に寄贈された著作物に加えて、遺品や写真などとともに、文書類が収蔵され、公開されている。

周南市立中央図書館では、高橋亀吉自身が分類した「私の著書目録」の分類に従って文庫を分類し、それら以外の資料については、12類（高橋亀吉研究：3点）、13類（小冊子や雑誌類：26点）、14類（その他の資料：9点）として新しく類を設けている。この中で14類として、日本経済新聞の「一言多言」の自筆原稿（草稿）が110枚（B5）収蔵されている。ちなみに、近代日本史料研究会（2007）「4-8 執筆原稿・講演原稿・メモ類」にも、「一言多言」に限らず多くの原稿類が残されている。

## 2.4 国立国会図書館憲政資料室「高橋亀吉文書」

国会図書館には高橋亀吉の著書が「文庫」としては所蔵されていないが、高橋亀吉の著作のほとんどが一般蔵書とともに所蔵されている。

国会図書館の「憲政資料室」には、日本近代の政治家・軍人・官僚などの個人が所蔵していた資料などが収蔵されている。収蔵資料は2008年4月現在で465点にも上る。これらの文書の中に高橋亀吉文書も収蔵されている。国立国会図書館憲政資料室（1994）では、「高橋亀吉文書」が紹介されている。

高橋家から寄贈された国立国会図書館憲政資料室「高橋亀吉文書」には、『高橋亀吉文書目録』（A4版型、204頁＋書翰2頁）が作成され、利用に供されている。この文書には文書4,457点に加えて書翰54点が収蔵されている。

これに加えて、日本証券経済研究所に収蔵されていた「高橋亀吉関係文書」を国立国会図書館憲政資料室に印画複製し、「第2次受入分」として収蔵し、利用に供されている。「高橋亀吉関係文書」（第2次受入分）は547点であり、昭和研究会や国策研究会の資料などが収められている。

以下では、必要に応じて、文書の表記を区別するために、国会図書館憲政資料室収蔵の「高橋亀吉文書」については文書NDLあるいは単にNDLと表記し、「高橋亀吉関係文書」（第2次受入分）については文書JSRIあるいは単にJSRIと表記することがある。

## 2.5 徳山大学総合研究所「高橋亀吉文庫・文書」

徳山大学総合経済研究所では、研究所事業の一環として、『総研レビュー』を発行することとなり、その特集号として、地元出身の経済評論家として活躍した高橋亀吉を編むこととなった。その特集号は徳山大学総合経済研究所（1999）「特集：独創的エコノミスト－高橋亀吉」『総研レビュー』第15号に纏められている。

高橋亀吉の所蔵していた書籍や著作ならびに文書が、すでに日本証券経済研究所や国会図書館憲政資料室に寄贈されていたことは分かっていたが、高橋亀吉の顕彰事業に関して高橋家を訪問したとき、高橋亀吉の著作や活動に伴って集められたあるいは発生した資料などがまだ残されていた。これらの著作と、資料などを文庫・文書として引き取るようになった。

高橋亀吉の著作は「高橋亀吉文庫・文書」として整理し、『高橋亀吉関連文書目録』を作成し

ている。また、資料の類は「高橋亀吉関連文書」として国会図書館憲政資料室の様式に準じて目録を作成している。それとともに、総合研究所のホームページに高橋亀吉サイトを設け、高橋亀吉文書について整理した一部を掲載している。

徳山大学総合研究所の「高橋亀吉関連文書」については、文書 TURI あるいは単純に TURI と表記する。

表1 徳山大学総合研究所  
『高橋亀吉関連文書』の概要

コード	グループ	件数
I	論文・講演・経済雑誌	62
II	収蔵雑誌・資料	13
III	戦時経済資料	8
IV	高橋財界月報目次綴り	1
V	高橋亀吉執筆構想メモ及び参考資料綴り	58
VI	高橋亀吉文庫・文書目録	9
VII	関連資料製本	7
VIII	総研管理資料	26
IX	事業集成 高橋亀吉	32
	計	216

高橋亀吉は著作を改訂する場合、直接書き込みするばかりではなく、該当する記事や抜き刷りあるいはメモ用紙を葉のように随所に差し込んである。徳山大学総合研究所に収蔵されている「経済史三部作」の内、『大正昭和財界変動史』・『近代経済形成史』と『金融の基礎知識』に関する著作については、高橋亀吉が直接書き込みをしたものがあり、葉も挟まれている。徳山大学総合研究所では、これらをスキャナーで読みとり、画像として文書化したものであり、また、ファイル化し、印刷したものを文書化している。

表2 経済史三部作差し込み資料

書名	資料	件数
大正昭和財界変動史	上巻	19葉
	中巻	19葉
	下巻	51葉
近代経済形成史	1巻	155葉
	2巻	234葉
	3巻	11葉
近代経済発達史	全巻	なし

注) 著作に直接書き込みを行った『近代経済発達史』は次節の近代日本史料研究会の高橋亀吉関係文書にも見当たらないので、別所にあるかもしれない。

表3 金融関連著書に関する差し込み資料

書名	件数
金融の基礎知識 (初版)	24葉
金融の基礎知識 (改訂版)	42葉
日本金融論	85葉

## 2.6 近代日本史料研究会「高橋亀吉関係文書」

高橋亀吉の活動の拠点であった高橋家は没後もそのままであったが、平成16年に、それを取り壊して新築することになった。その際の著作と文書の来歴が、近代日本史料研究会代表である伊藤隆(2005)において記されている。

その後、伊藤隆(平成19年)によると、文部科学省科学研究費「口述記録と文書記録を基礎とした現代日本の政策過程と政策史研究の再構築」によって『高橋亀吉関係文書目録』(近現代史料・関係文書目録4)が作成された。その目録(A4版型、136頁)によると、資料を「書籍・雑誌・新聞などの活字刊行物」と「辞令・手書き原稿・行政文書・書翰」に大別し、次の表4のように、さらに小分類を施して整理されている。

「近代日本史料研究会」は英記表現を「The Japanese Modern Historical Manuscripts Association」としているが、ホームページでは略記として「KINS」を採用しているので、この文書のコードとして「KINS」を当てることにする。次の表4に見られるように、グループは4つに分かれ、グループ2と3については、サブグループが設けられている。また、文書目録では、それぞれの史料に封筒番号が付けられている。これは最初に史料を収めた封筒に番号を付けた上で、史料ごとに分類したことにより付けられたものと思われる。近代日本史料研究会の「高橋亀吉関係文書」のコードとして、KINSの後にグループコードを付し、グループ1と2については、そのまま直接に史料番号を付して、同時に封筒番号を併記することにする。グループ3

と4については、サブグループ番号も付けた上で、史料番号を付けることにし、同時に封筒番号を併記する。

この史料あるいは資料の中には高橋亀吉による多くの書き込みがある著作も含まれている。これらの文書はやがて国立国会図書館憲政資料室に統合されることが企図されているので、統合されれば、高橋亀吉研究や生涯を現役で過ごした当時の経済観察・分析に役立つことが期待される。

表4 近代日本史料研究会  
『高橋亀吉関係文書』の概要

カテゴリー	文書グループ	点数
1	高橋亀吉文庫目録類	7
2	高橋亀吉著書	151
3	活字資料（定期刊行物をふくむ）	
	3-1 新聞雑誌などに発表した論文・記事	123
	3-2 対談・座談会・講演など	192
	3-3 高橋亀吉関連記事	73
4	原稿・文書・書翰・その他	
	4-1 早稲田大学時代	24
	4-2 久原鉱業時代	5
	4-3 太平洋会議	4
	4-4 各種委員・調査会関係（戦前）	66
	4-5 各種委員・調査会関係（戦後）	64
	4-6 高橋経済研究所・日本経済研究所関係	14
	4-7 拓殖大学関係	42
	4-8 執筆原稿・講演原稿・メモ	122
	4-9 執筆材料	70
	4-10 書翰	23
	4-11 名簿・住所録	17
	4-12 分類不能・その他	31
	計	1028

出所：近代日本史料研究会（2007）『高橋亀吉関係文書目録』より作成。

### 3 高橋亀吉文書から見た足跡

#### 3.1 『高橋財界月報』の発行

高橋亀吉は金解禁問題で名を馳せると、世の中が「論壇の新進経済評論家」として迎え、財界有志の寄付金で高橋経済研究所が昭和7年に設立されている（当初11人のスタッフ）。研究所の

事業の一環として、高橋財界研究会による『高橋財界月報』を昭和11年に第1巻1号を発刊し、昭和23年5月の公職追放まで発行している。『高橋財界月報』としては、第13巻7・8号まで発行されている。途中、昭和20年5月号は東京大空襲の時期に当たり、翌6月号と合併されて発行されており、終戦混乱時の昭和20年8月号と9月号は10月号と合併して発行されている。

『高橋財界月報』の発行期間を見れば、戦間期の後半、すなわち太平洋戦争前から戦時中と戦後間もなくに掛けて、一時は紙不足に悩まされながらも続けて発行されている。当然のことながら、時局のテーマが多いが、資料的価値としては、戦時統制経済の実相と、それに直面した高橋亀吉の分析や焦点の当て方を窺うことができる。

『高橋財界月報』については、その全貌が小林和子（1992）によって解説され、全13巻152号の目次（章のみ）が含まれている。日本証券経済研究所図書館には昭和22年（第12巻）12月号を除き実物がすべて揃っている。（小林和子（1992）によれば、第12巻12号は「財務省大蔵文庫」に所蔵されていることを確認している。p. 265）この欠号分は、マイクロフィッシュ化されているが、プランゲ文庫にも含まれている。しかし、日本証券経済研究所に所蔵されている『高橋財界月報』は、一部に欠損が見られ、全体的に老朽化が激しく、閲覧が可能ではない。

徳山大学総合研究所では、『高橋財界月報』の実物はないが、高橋亀吉が整理していた『高橋財界月報』の目次を、第8巻、第22巻、第23巻が欠落しているものの、第1巻から11巻まで「綴り」として収蔵している。『高橋財界月報』は創刊号（追記を含めれば、11編）を除けば、3か

ら6編のテーマで構成されている。1テーマを章とすれば、『高橋財界月報』の目次綴りは節・項のレベルまで収められている。

また、国会図書館憲政資料室「高橋亀吉文書」によると、次の表に見られるように、『高橋財界月報』の実物が収蔵されている。日本証券経済研究所の文書を写真複製した「高橋亀吉関係文書」（第2次受入分）については、『高橋財界月報』に関する文書は見当たらない。

高橋亀吉（昭和35年、p.276）によれば、『高橋財界月報』は300部しか発行されていないので、読者によって保管されている実物を確認することは非常に困難であろう。当時の紙の性質や老朽化のことを考えれば、戦間期後半から戦中期・戦後間もなくの時期について経済に関する貴重な観察や分析を残す意味でも、早い段階でのマイクロフィッシュなどでの保存を考えるべきだろう。

表5 『高橋財界月報』の発行履歴と所在

巻	和暦	西暦	日本証券経済研究所	国会図書館	憲政資料室	プランケ文庫	徳山大学
			実物	実物	実物	マイクロフィッシュ	目次のみ
第1巻	昭和11年	1936	○				○
第2巻	昭和12年	1937	○				○
第3巻	昭和13年	1938	○				○
第4巻	昭和14年	1939	○		5号		○
第5巻	昭和15年	1940	○		8号		○
第6巻	昭和16年	1941	○		1号		○
第7巻	昭和17年	1942	○	4号～	12号		○
第8巻	昭和18年	1943	○	○	1,3,12号		×
第9巻	昭和19年	1944	○	9巻6・8号欠号			○
第10巻	昭和20年	1945	○	2号まであり	1,12号	11号～	○
第11巻	昭和21年	1946	○		3号	○	○
第12巻	昭和22年	1947	12号欠号			○	×
第13巻	昭和23年	1948	○	6号		～7・8号	×

凡例：○は収蔵されているもの、徳山大学の×は収蔵されていないもの。

注) 通常、月1号の発行であり、臨時増刊号や合併号もあり、全部で147冊となる。

注) 国会図書館は第13巻6号を除き、「和雑誌」として収蔵されているもの。第13巻6号については「一般図書」として所蔵されているもの。

表6 『高橋財界月報』に関する文書

コード	巻号	発行年	備考
NDL786	第4巻5号	昭和14年	誌名が「財政月報」と誤記されている。
NDL788	第5巻8号	昭和15年	同上。
NDL789	第6巻1号	昭和16年	同上。
NDL1574	第7巻12号	昭和17年	標題が「新企業体制の確立」と誤記されているが、正しくは「新企業形態確立の急務」である。
NDL1599	第8巻1号	昭和18年	発行元が「高橋経済研究所」と誤記されている。
NDL1600	第8巻3号	昭和18年	発行元が「高橋経済研究所」と誤記されている。
NDL1971	第10巻1号	昭和20年	
NDL1978	第10巻12号	昭和20年	発行元が「高橋経済研究所」と誤記されている。
NDL1980	第11巻3号	昭和21年	
NDL4456	その他(高橋財界研究会住所録)		
NDL4457	その他(現金出納帳)		高橋財界研究会現金出納帳と思われる。未確認。

出所：国会図書館憲政資料室「高橋亀吉文書」より。

ちなみに、国会図書館に『高橋財界月報』の実物が第7巻4号から10巻2号（内、9巻6・8号が欠号）収められている。国会図書館の「雑誌記事検索」では、第13巻6号が抽出され、5件の記事があることが分かる。

プランク文庫の雑誌コレクションには、マイクロフィッシュ版（fiche 枚数15枚）として、ZD（経済部門）のZD01（経済・経済事情：経済評論／地域経済／経済団体）の中に、162 T81『高橋財界月報』高橋財界研究会10巻11号（1945年11月）から13巻7・8号（1948年8月）が収蔵されている。

これらの他に、大学の図書館に実物の一部が収蔵されている。東京大学・大学院法学政治学研究所・附属近代日本法政史科センター（明治新聞雑誌文庫）に4巻11号、5巻6号と11号、大分大学・経済学部・教育研究支援室に11巻1-5号、立命館大学図書館に第1巻が所蔵されている。（検索によるもので、未確認。）

また、昭和15年頃から見られる「共栄圏経済体制」に関する『高橋財界月報』に掲載された

論文は『共栄圏経済建設論』に収められているものと思われる。（鳥羽欽一郎（平成4年）、p. 252。）

『高橋財界月報』には、創刊号発行時に「付録」が刊行されているが、これは実質的には臨時報である。定期発行とは別に読者の要請に応じて講演や座談会などが開催され、それを起稿して臨時報が発行されている。徳山大学総合研究所の「高橋亀吉関連文書」には、次の表のように創刊号付録と臨時報が収蔵されている。表中丸印○は国会図書館に和図書として所蔵されているものであり、徳山大学には、これら以外に創刊号付録と『時局と経済政策の見透』（改訂再版）が収蔵されている。ちなみに、『改訂再版』は『時局と経済政策の見透』から39頁だけが検閲によって全文削除されたものである。臨時報は月刊の『高橋財界月報』の版型と異なり、A5より一回り小さい横12.8cm×縦18.8cmとなっている。『高橋財界月報』の版型は横長であり、国立国会図書館では15×21cmと表記されている。

表7 『高橋財界月報』臨時報（徳山大学総合研究所収蔵のもの）

論題名	種別	発行所	国会図書館
支那幣制改革と日本の位置	高橋財界月報創刊号付録	高橋財界研究会	
時局と経済政策の見透	高橋財界月報臨時報	高橋財界研究会	○
時局と経済政策の見透 改訂再版	高橋財界月報臨時報	高橋財界研究会	
税制改革と産業経済の破壊	高橋財界月報臨時報	高橋財界研究会	○
欧州大戦化の我が経済界に及ぼす影響に就て	高橋財界月報臨時報	高橋財界研究会	○

出所：徳山大学総合研究所「高橋亀吉関連文書」より抽出したもの。

凡例：○は国会図書館に和図書として所蔵されている。

注）『税制改革と産業経済の破壊』については、拓殖大学図書館、東京大学経済学部図書館、大分大学経済学部教育研究支援室にも所蔵されている。

### 3.2 日本経済研究所の創設

高橋経済研究所は戦後の混迷状態の中で「開店休業」の状態にあり、資金源もすでに枯れていた状態にあった。この間も高橋亀吉は活動を続けていたが、事実上、研究所は「高橋個人色

一本」であった。研究所の資金源と人材の多様化を企図して財団法人日本経済研究所が昭和21年4月に創設された。この日本経済研究所は高橋経済研究所の受け皿として、一切を引き継ぎ、高橋亀吉は理事長兼研究所長に就任している。